

すく展示するには適しているが、他のデータベースとあわせた資料検索ができないという難点がある。樋口氏が作成した「東アジア民話データベース」はファイルメーカーを使用した汎用型で、多言語対応のため、将来的には世界中の口承文芸資料を合わせて検索することも可能である。現在、このデータベースには6万3千話以上の民話が格納されており、利用者は話のタイトルや語り手、採録地など様々な検索を通して多様な民話を聞くことができる。樋口氏は更にこのデータベースを拡大した「世界口承文芸アーカイブ」を日本発で作るという試みについても報告した。

こうした報告を受けて会場からは、紹介されたデータベースの技術を自分たちも使えるか、といった質問や、語り手と採録者の権利に関する質問・意見等が出て、活発な議論が交わされた。学会としては、まず既存の口承文芸デジタルアーカイブについての情報交換が必要だという認識で一致した。本シンポジウムは、学会員が世界の口承文芸デジタルアーカイブの状況にふれ、個人や所属先が所蔵する資料の整理と活用について考えることに扉を開いたと言えるだろう。(熊野谷葉子)

第41回大会シンポジウム「口承文芸デジタルアーカイブの課題と展望」

個人調査資料アーカイブ構築の方法と課題

—欧米・ロシアの口承文芸デジタルアーカイブを参考に—

熊野谷 葉子

口承文芸資料の適切な保管と公開とは

2016年9月にラトヴィア国立図書館で行われた国際学会「デジタルフォークロア学に向けて (Towards Digital Folkloristics)」では、欧米各国の図書館員、博物館員、フォークロア研究者が3日間にわたってデジタルアーカイブ作成に関する報告、インターネット上でのフォークロアの生成・蒐集・公開に関する報告を行った。学会の詳しい内容については別稿があるので繰り返さないが<sup>(1)</sup>、筆者がそこで実感したことは、欧米諸国では19世紀末以来蒐集されてきた膨大なフォークロア資料を図書館や博物館が収蔵し、専門のアーカイブ部署がそのデジタル化と解析、公開を着々と進めている、ということである。その形態は様々だが、基本的な作業の手順は世界共通で、以下のようなものである。

- ①アナログデータをデジタル化する。すなわちオープンリールやカセットテープへの録音はデジタル変換して音声ファイルに、手書きのノート等は撮影して画像ファイルにする。
- ②音声データを聞き起こして文字テキストを作る。画像ファイルになっている手書き文字は解読して打ち込み、これも文字テキストにする。

③整理されたデータを取捨選択して使いやすいようにまとめ、ウェブサイト等で公開する。

この流れ自体はごく一般的で、門外漢にも理解できる。だが実際には、3段階すべてが多  
くの人材と資金と時間を必要とする作業であり、国や自治体が資金を提供し、各段階を専門  
家が担って初めて可能になるものだ。欧米諸国では各民族のフォークロアを重要な文化遺産  
と見なす意識が高く、それはおそらく日本の比ではない。はたして日本には、市井の人々の  
語りをアーカイブ化して次世代に伝えようという試みがどの程度あるだろうか。一方で著作  
権やプライバシーへの配慮は広範囲に求められており、そのことが利用可能な採録資料にも  
手を付けずにおく口実になってはいないだろうか。

さて、筆者の専門はロシア・フォークロアで、1995年から度々現地調査を行ってきた。特  
にアルハンゲリスク州上トイマ地区では1910年代生まれの世代からも歌や物語を数多く採録  
してきたが、その資料は、論文や学会発表、エッセイ、ラジオ、授業、研究会などで断片的に  
は取り上げてきたものの、圧倒的多数は休眠状態である。コピーがロシアの現地郷土資料館や  
図書館に保管されているとは言っても、地元の人々がそれを利用している気配もない。そこで  
筆者は、この個人採録資料を可能なかぎりデジタルアーカイブ化して研究者および地元の人々  
と共有し、また一般向けのマルチメディア出版物として刊行しようと考えている。本稿では  
まず、ロシアのフォークロア研究機関による資料のアーカイブ化と今日の公開状況を数例検  
討し、それを踏まえて自らのデジタルアーカイブ構想について述べたいと思う。

## ロシアのフォークロア調査、資料保管、公開方法

19世紀後半のロシア帝政下で始まったフォークロア蒐集活動は、ソ連時代には「民衆創  
造」を保存し研究するという目的で組織化され、ソ連崩壊後も今日まで続いている。多くの  
大学の文学部や文学研究所、音楽大学にはフォークロア講座があり、そこに所属する教員や  
研究者は講座の学生を率いて毎年2～3週間のフィールドワークに出かけている。現地では  
班に分かれて質問係、録音係等を分担し一定のテーマについて聞き取りを行う。録音、録  
画、写真等は調査終了時に回収し、学生はフィールドノートを清書して講座へ提出する。講  
座では提出された資料をまとめ、録音資料をベースとする「目録」を作成し、そこに話題や  
インフォーマントに関する情報を記載する。ここで現地調査は一旦終了し、ファイルは講座  
のアーカイブの棚に保管される(図1)。その後は必要に応じてファイルを探して聞き起こ  
し、資料集の出版や論文の執筆に利用するわけである。

伝統的にソ連、ロシアはフォークロア資料の出版に積極的だったが、現在は予算重視で  
紙媒体の発行部数が少なく、ロシアの学術機関は所蔵資料のウェブ上での公開に力を入れ  
ている。数例をあげよう。

ペテルブルグのロシア科学アカデミーロシア文学研究所では、2000年から全25巻の『ロ  
シアフォークロア大全。プリーナ』(以下『大全』)を順次刊行している<sup>(2)</sup>。これは1冊2

kgもある紙の本で、19世紀以来ロシアで採録されてきた英雄叙事詩ブリーナを、未公開資料を含めすべて網羅しようという壮大な全集である。ところが近年同研究所では、所蔵する音声資料を『大全』にからめてウェブサイト上で公開するという企画が進行している<sup>(3)</sup>。すなわち、『大全』に倣ってサイトにも地域別のインデックスがつけられ、地域名をクリックすると語り手の名前がずらりと出てくるのである。さらに各語り手のレポーターが一覧でき、語りを聴きながら『大全』に掲載されているテキストが読める。またここには、『大全』にはない叙事詩以外の歌や昔話のレポーターも収録されている。

モスクワ音楽院のウェブサイトは、また違った試みをしている<sup>(4)</sup>。同サイトではカルーガ州のある地域で同音楽院が集めてきた民謡等の音声・文字資料を公開しているが、そこにある約9000点の展示の中には、同州の民俗学術センターの所蔵資料や個人のコレクションも含まれ、音楽に偏らない総合的な記述となっているのである。専門分野の異なる機関がデータを持ち寄り、それぞれの資料について記述するという、分野と組織を横断する試みだ。

ウェブサイトの利点の一つは、フォークロア資料を音声や動画、地図や既刊書籍など多様な資料と合わせて閲覧できることである。とは言えデータの無断転載や文脈を無視した引用の危険を考えると、公開範囲を真に興味を持つ人に絞りたい場合もある。その解決策の一例が、2014年に国立シクティフカル大学で出版したディスク『ウスチ・ツィリマのフォークロア伝承 マルチメディア便覧・文献案内』である。

このディスクをパソコンに入れて表紙ページをクリックすると、ウェブサイトのトップページに似た画面が立ち上がる(図2左)インデックスには、「地理」「歴史」「研究」…とあり、ここから様々な資料にアクセスできる(図2右)例えば「地理」をクリックすると、この資料集がターゲットとするウスチ・ツィリマの古地図から最近の行政地図までが一覧できる。「資料」に進めば同地のフォークロアテキストをジャンル別に読むことができ、「図書」にはこの地域の地理や歴史、フォークロアに関する文献が何十冊もPDF化さ

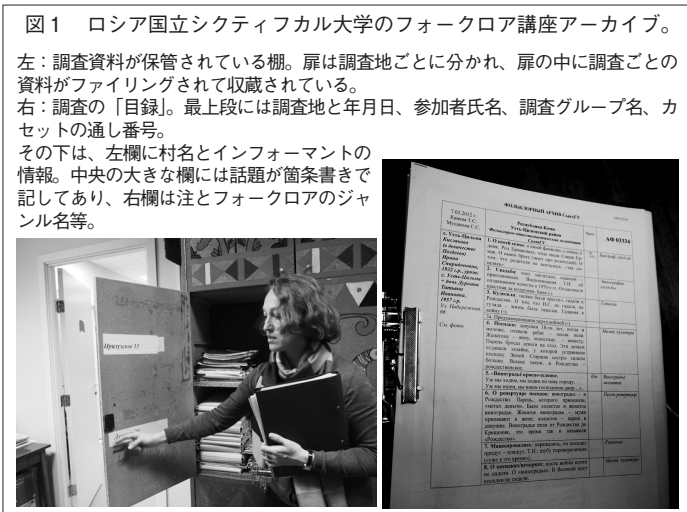
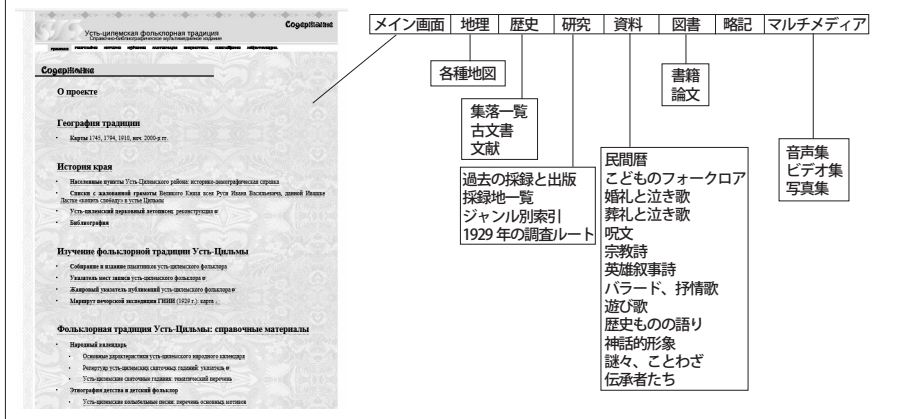


図2 ディスク『ウスチ・ツィリマのフォークロア伝承 マルチメディア便覧・文献案内』画面



れて格納されている。著作権の問題はさておき、興味深いのは「資料」中の膨大なテキストのいくつかが「マルチメディア」に入っている音声資料や動画資料と関連付けられていることだ。そこでは例えば、2007年に同地で採録された英雄叙事詩の語りをテキストと合わせて動画で見ることができ、さらに語り手の父親が1950年代に語った録音とも比較できるのだ。

このように、ロシアのフォークロア研究諸機関は、自分たちが採録しデジタル化したアーカイブ資料と既刊の資料を組み合わせて、工夫した公開の場を作っている。それでは我々は、これを参照して個人調査のデータからどのようなアーカイブを作りうるだろうか。

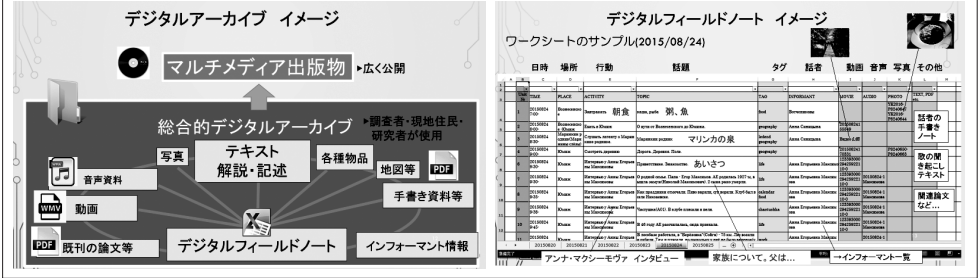
### 個人調査資料のデジタルアーカイブ化と公開

筆者が目指しているのは、アルハンゲリスタク州上トイマ地区で行ってきた日本人数名によるフィールドワーク調査資料のデジタルアーカイブ化と一部公開である。アーカイブは採録された内容を整理し格納した様々なファイルの総体で、これはネット上で全面的に公開するようなものではない。調査者としかるべき機関が所蔵して目次だけ公開し、要請に応じて資料提供を行えばよい。基本的なユーザーは研究者と現地の住民になるだろう。一方、採録された資料には、北ロシアの暮らしや口承文芸を知る材料として日本でもロシアでも一般に公開されるべきものがある。このため、我々は上記のデジタルアーカイブから必要な情報を抽出し、解説を加えてマルチメディア出版物として提供することを考えている（図3左参照）。この出版物のユニークな点は、ロシアの日常的な事物への外国人ならではの観察が含まれるところだろう。例えば朝食に出される各種の粥の皿、森の風景とキノコ狩り、サモワールで湯を沸かし茶を淹れるプロセス、といったような画像は、上述のようなロシアのサイトでは

図3 個人調査資料のデジタルアーカイブと出版物等のイメージ

左：デジタルアーカイブの構造と、そこから作られるマルチメディア出版物のイメージ図

右：デジタルフィールドノートの一日分のサンプル。日本語で書き込まれている部分は説明のために上から貼ったもの。



およそ見られないが、日本人読者（視聴者）にとっては有益な情報となりうる。一方で、ロシア口承文芸のテキストはただ音声や動画をつけておけばよいわけではなく、翻訳や解説、関連文献の提示が必要だ。これがロシアのウェブサイトやディスクとは異なる点である。

これらを考え合わせ、個人の力でできる範囲を考えると、個人調査資料のデジタルアーカイブ化の方法はおのずと絞られてくる。朝食の写真や森の風景まで入れるためには、ロシアで行われているような録音資料ベースで目録を作る方法ではなく、調査全体を時間軸に沿って記述し、年月日と時刻に資料を直接結びつけるデジタルフィールドノートを作る必要がある。ロシア人を含む数人が共同で作業するため、このノートは一般的な表計算ソフト excel で作成する（図3右）。構成は単純で、縦軸に時間をおき、横軸には行動や話の内容、写真・録音・録画資料等のファイル名を記録する。さらに主なテーマのタグをつけておけば、後で特定の話題を探して検索や抽出を行うことも容易になる。

素人でもデジタルデータの扱いができるようになった現在、このようなデジタルアーカイブであれば個人調査資料でも死蔵せず利用可能な形で保存することができる。ただし、構築されたアーカイブが将来的にどう管理されるかについては、別途考えなければならない。

注

- (1) 熊野谷葉子「デジタル・フォークロア学の現在と未来」、ロシア・フォークロアの会『なるうど』74号、2017年、1-11頁。
- (2) Свод русского фольклора. Былины в 25 томах. СПб., 2001-
- (3) ロシア科学アカデミーロシア文学研究所音声アーカイブ所蔵資料 (<http://zvukbyliny.pushkinskijdom.ru/>)
- (4) モスクワ音楽院民族音楽研究センター「音楽民族学地図」(<http://folk.rusign.com/p/about.html>)  
(くまのや・ようこ／慶応義塾大学)